

# 多賀城市内の遺跡 1

— 平成21年度ほか発掘調査報告書 —

平成23年7月

多賀城市教育委員会

## 序 文

特別史跡多賀城跡をはじめとする多くの埋蔵文化財は、長い年月の中、地域で暮らす人々によって守り、引き継がれたものであり、本市が歴史のまちと言われる所以はここにあります。このことから、これら貴重な「文化遺産」を後世に伝えていくことは、我々の重要な責務であると考えております。そのため、当教育委員会としても、開発事業との円滑な調整を図りつつ、国民共有の歴史的財産である埋蔵文化財を適正に保護し、その活用に努めているところであります。

さて、今回報告いたします調査は、平成21年度に市単独事業で実施した発掘調査14件と、平成6年度に受託事業で実施した発掘調査1件であります。小範囲の調査ではありましたが、弥生時代・奈良・平安時代・中世の遺構・遺物が発見されました。ひとつひとつの成果は断片的なものでありますが、このような成果の積み重ねにより「史都 多賀城」の歴史が少しづつ紐解かれていくものと確信しております。

最後になりましたが、発掘調査に際しまして、御理解と御協力をいただきました地権者をはじめ関係各位に対し、心より感謝申し上げます。

平成23年7月

多賀城市教育委員会

教育長 菊地 昭吾

## 例　言

- 1 本書は、平成 21 年度に市単独事業で実施した調査 14 件と、平成 6 年度に受託事業で実施した調査 1 件の成果をまとめたものである。
- 2 遺構の名称は、各遺跡とも第 1 次調査からの連続番号である。
- 3 測量法の改正により、平成 14 年 4 月 1 日から経緯度の基準は、日本測地系に代わり世界測地系に従うこととなったが、本書では過去の調査区との整合性を図るため、従来の国土座標「平面直角座標系 X」を用いている。
- 4 挿図中の高さは標高値を示している。
- 5 土色は『新版標準土色帖』（小山・竹原：1996）を参考にした。
- 6 金属製品の X 線透過撮影は及川規氏（東北歴史博物館）に依頼した。
- 7 本書の執筆は担当職員の協議のもと、I～III・VI・IX～XII を武田健市、IV・V を相澤清利、VII・VIII を島田敬が担当し、編集は武田が行った。また、遺物の写真撮影は鈴木琢磨、畠山未津留が行った。
- 8 調査に関する諸記録及び出土遺物はすべて多賀城市教育委員会が保管している。

## 凡　例

- 1 本書で使用した遺構の種類を示すアルファベット記号は以下のとおりである。  
S B : 建物　　S A : 柱列　　S D : 溝　　S K : 土壙　　Pit (P) : 柱穴及び小穴  
S X : 道路・河川及びその他の遺構
- 2 奈良・平安時代の土器の分類記号は『市川橋遺跡一城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書 II』に従った。
- 3 瓦の分類は「多賀城跡 政府跡 図録編」（宮城県多賀城跡調査研究所 1980）、「多賀城跡 政府跡 本文編」（宮城県多賀城跡調査研究所 1982）の分類基準に従った。
- 4 本文中の「灰白色火山灰」の年代については、伐採年代が 907 年とされた秋田県払田柵跡外郭線 C 期存続中に降灰し、承平 4 年（934）閏正月 15 日に焼失した陸奥国分寺七重塔の焼土層に覆われていることから、907～934 年の間とする考え方と（宮城県多賀城跡調査研究所『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1997』1998）、『扶桑略記』延喜 15 年（915）7 月 13 日条にある「出羽国言上雨灰高二寸諸郷桑枯損之由」の記事に結びつけ 915 年とする考え方がある（町田洋「火山灰とテフラ」『日本第四紀地図』1987、阿子島功・壇原徹「東北地方、10C 頃の降下火山灰について」『中川久夫教授退官記念地質学論文集』1991）。当センターでは考古学的な見解を重視し、前者の年代観に従っている。

## 調査要項

- 1 調査主体 多賀城市教育委員会 教育長 菊地昭吾  
2 調査担当 多賀城市埋蔵文化財調査センター 課長 高倉敏明  
3 調査担当者 多賀城市埋蔵文化財調査センター 係長 千葉孝弥  
副主幹 武田健市  
研究員 石川俊英 島田敬 相澤清利  
発掘調査員 鈴木琢郎 四家礼乃 岩山未津留  
4 調査協力者 大友輝雄 遠藤義二 佐藤丑之助 文屋功 三浦のり子  
株式会社イズミヤ 株式会社高静設備工業  
5 整理従事者 丑田明希 佐々木清子 高橋由里子 中村千恵子 本間規恵 宮城ひとみ 横山佳織

## 目 次

I	多賀城市の位置と市内の遺跡	1
II	市川橋遺跡第75・77・78次調査	4
III	市川橋遺跡第76次調査	14
IV	山王遺跡第78次調査	15
V	山王遺跡第79・80次調査	21
VI	新田遺跡第14次調査	23
VII	新田遺跡第60次調査	38
VIII	新田遺跡第61次調査	39
IX	新田遺跡第62次調査	40
X	小沢原遺跡第14次調査	41
XI	西沢遺跡第17次調査	42
XII	大日南遺跡第9次調査	43

## I 多賀城市の位置と市内の遺跡

多賀城市内の地形についてみると、中央部を北西から南東方向に貫流する砂押川を境に、東側の丘陵部と西側の沖積地に二分される。丘陵部は、松島・塩釜方面から延びる標高40～70mの低丘陵であり、東西に向かって枝状に派生している。沖積地と接する付近では谷状の地形を形成しており、緩やかではあるが起伏に富んだ様相をみせている。沖積地は、泉ヶ岳に端を発する七北田川東岸に広がっており、仙台平野の北東部に相当する。特に仙台市岩切方面から多賀城跡にかけての県道泉・塩釜線沿いには標高5～6mの微高地が延びており、その北側には利府町にまたがる低湿地が広がっている。一方、南側には大小の微高地や低湿地、旧河道などがあり、海岸に近い場所では浜堤列も確認できる。

市内には、40を超える遺跡が所在している。西側の沖積地から丘陵部の西端にかけては、新田・山王・市川橋・高崎・西沢遺跡など市内でも有数の規模をもつ遺跡が隣接して分布している。これらの遺跡で発見された遺構や遺物には、陸奥国府が置かれた多賀城や付属寺院の多賀城廃寺と密接に関わるものが多く認められ、この時期に限ってみれば一連の遺跡群と捉えることができる。一方、南部には海岸線沿いの浜堤上に八幡沖遺跡、東端部には柏木遺跡や大代横穴墓群などが点在している。

本書に関連する遺跡は、以下の6遺跡である。

市川橋遺跡は、市中央部を北西から南東方向に貫流する砂押川東岸に形成された、標高2～3mの微高地上に位置している。これまでの調査で特に注目されるのが、多賀城南面に施工された古代の方格地割りの発見である。これは、城外の二大幹線道路である南北大路と東西大路を基準とする南北・東西の道路によっておよそ1町四方に区画されたものであり、その範囲は西側に隣接する山王遺跡西半部にまで及んでいる。本遺跡南半部はこの幹線道路の交差点にあたり、周辺では規則的に配置された大規模な建物群や四面庇付建物が発見されるなど、城外でも最も重要な地区であると考えられる。

山王遺跡は、砂押川西岸に形成された、標高3～4mの微高地に立地している。これまでの調査で、弥生時代中期頃の水田跡や古墳時代前期～後期の集落跡、古代の方格地割、大溝によって区画された中世の屋敷跡、近世の堀跡や井戸跡などが発見されている。このうち、古代の方格地割は南北大路と東西大路の二つの幹線道路を基準とし、東西・南北の直線道路によっておよそ1町四方の区画を造成したものである。これによって形成されたまち並みからは、上級役人の邸宅や中・下級役人の住まいなどを構成する建物跡や井戸跡などが多数発見されている。

新田遺跡は、七北田川東岸に形成された、標高5～6mの微高地に立地している。縄文時代から中世にかけての遺跡として知られているが、特に中世では大小の溝で区画された屋敷跡が多数発見されている。このうち、寿福寺地区では12世紀後半から16世紀にかけて連続して屋敷群が形成されていたことが明らかとなり、出土遺物から上級武士の屋敷と考えられている。西側に隣接する仙台市宮城野区岩切から本遺跡にかけての一带は、留守氏が支配する「高用名」に含まれる地域であることから、これらの武士層は留守氏と深く関わるものと推定されている。

小沢原遺跡は、多賀城跡南東側の低丘陵上に位置している。これまでの調査で、古代の掘立柱建物跡や竪穴住居跡、土器埋設遺構、土壙などが発見されている。桁行5間以上、梁行3間の掘立柱建物跡が確認されるなど、官人層の居宅の可能性が示唆されている。

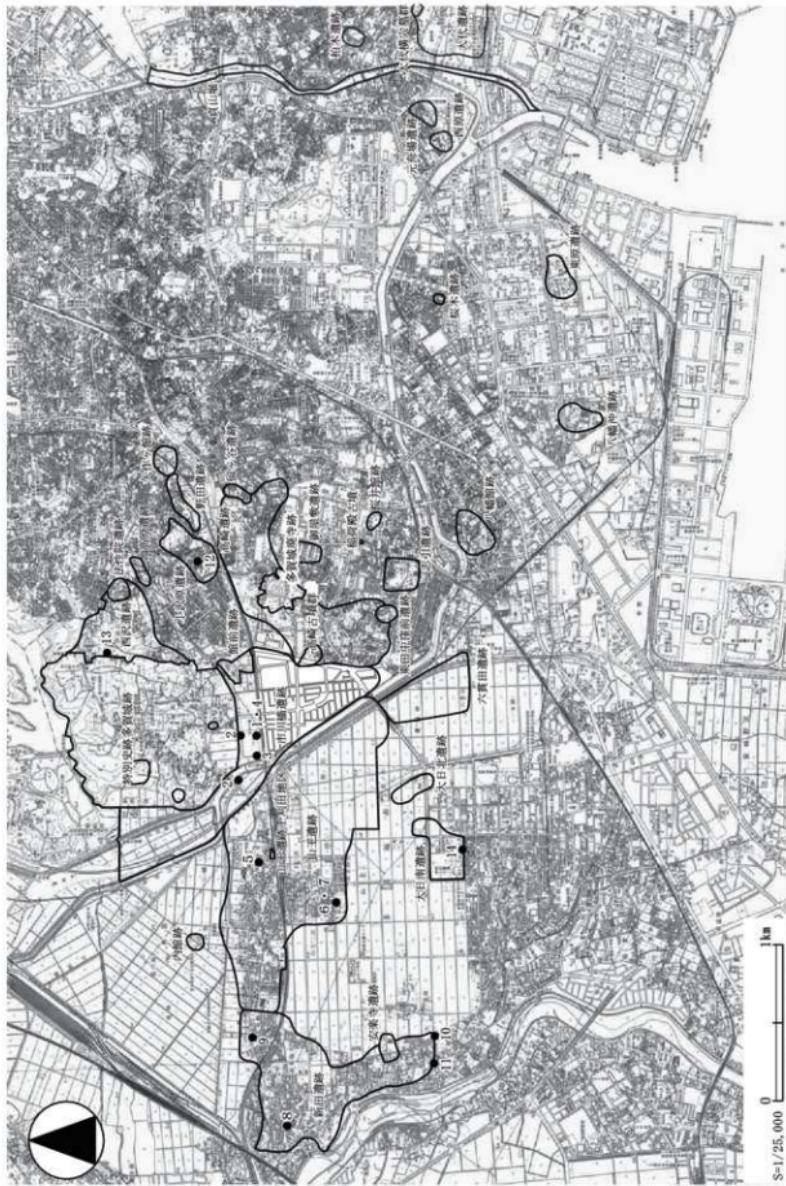
西沢遺跡は、多賀城跡東側の低丘陵緩斜面上に立地している。これまでの調査で、縄文時代及び古代か

ら近世の遺構・遺物が多数発見されている。特に平安時代では、鍛冶工法を含む堅穴住居や掘立柱建物跡が整備され、多賀城跡との関連性が示唆される。

大日南遺跡は、標高3mほどの沖積地に立地している。これまでの調査で15・16世紀を中心とする武士の屋敷跡が発見されており、新田遺跡と同様に留守氏との関係が示唆される。

#### (調査一覧)

No.	遺跡名	所在地	調査期間	調査面積	調査担当
1	市川橋遺跡第75次	市川字館前地内	平成21年7月22日	8 m <sup>2</sup>	武田・四家
2	市川橋遺跡第76次	市川字伏石、立石地内	平成21年7月25日	6 m <sup>2</sup>	武田
3	市川橋遺跡第77次	市川字館前地内	平成21年8月5日	5 m <sup>2</sup>	武田・四家
4	市川橋遺跡第78次	市川字館前地内	平成21年11月25日～11月28日	46 m <sup>2</sup>	武田・四家
5	山王遺跡第78次	山王字毛上28	平成22年2月9日～3月9日	26 m <sup>2</sup>	相澤・四家・畠山
6	山王遺跡第79次	山王字山王四区187、188	平成22年3月4日～3月5日	9 m <sup>2</sup>	相澤
7	山王遺跡第80次	山王字山王四区189-6外	平成22年3月24日	3 m <sup>2</sup>	相澤
8	新田遺跡第14次	新田字後110-7外	平成6年4月4日～4月28日	120 m <sup>2</sup>	石川
9	新田遺跡第60次	山王字北寿福寺地内	平成22年2月2日～2月3日	32 m <sup>2</sup>	島田・四家・畠山
10	新田遺跡第61次	新田字脇西29-1	平成22年2月23日	10 m <sup>2</sup>	島田・四家・畠山
11	新田遺跡第62次	新田字北開合30-2	平成22年3月27日	10 m <sup>2</sup>	武田
12	小沢原遺跡第14次	浮島二丁目81-5外	平成22年3月10日～3月12日	90 m <sup>2</sup>	武田
13	西沢遺跡第17次	市川字伊保石地内	平成22年2月18日	4 m <sup>2</sup>	武田
14	大日南遺跡第9次	高橋四丁目18-4外	平成22年3月30日	25 m <sup>2</sup>	武田



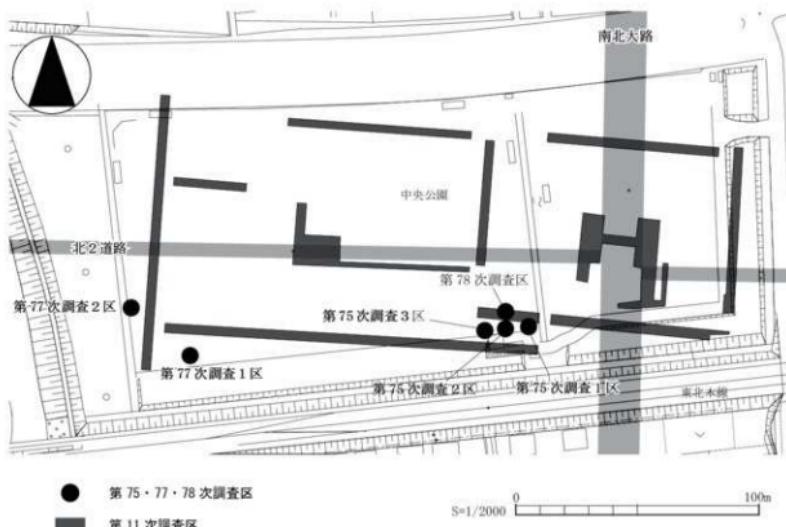
多賀城市の遺跡地図と調査区の位置

## II 市川橋遺跡第75・77・78次調査

### 1 調査に至る経緯と経過

本調査は、平成21年度中央公園施設整備に伴う発掘調査である。平成21年5月、多賀城市長より中央公園における施設整備計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画では、グラウンドの舗装のほか、地下排水工事及び防球ネット設置工事等が示されていた。当該区は古代多賀城南面に施行された南北大路西側に接しており、平成4年度に実施した第11次調査で大規模な柱穴を確認した地区である。この大規模な柱穴についてはSB470掘立柱建物跡として既に報告しているものの（註1）、調査範囲や期間の制約があり、現地での検討が不十分であったことから、機会を見て再度検証する必要がある遺構と考えていたものであった。当該計画については、防球ネットの基礎工事で3.7mの掘削が行われる以外は遺跡に影響が及ぶものではなかったものの、SB470についての確認調査を実施したい旨申し出たところ承諾を得た。なお、平成21年7月にダックアウトとスコアボードの追加工事についての協議書も提出され、一連の協議として取り扱うこととした。

7月23日、防球ネット設置に伴う調査を実施した（第75次調査）。3箇所の基礎掘削の内、東側のトレンチ（1区）と中央のトレンチ（2区）では、現表土下約1.3mで大規模な柱穴の一部を確認した。柱の位置から、第11次調査で確認したSB470の一部である可能性が推測された。一方、西側のトレンチ（3区）では黒褐色粘土が厚く堆積しており、新しい河川埋土であると考えられた。



第1図 調査区位置図

註1：多賀城市教育委員会『市川橋遺跡』多賀城市文化財調査報告書第50集 2000

8月5日、ダックアウト及びスコアボード設置に伴う調査を実施した（第77次調査）。第75次調査区同様、現表土下約1.3mで、溝跡を確認した。

11月25日、グラウンド舗装工事に先行し、S B 470の確認調査を開始した。現表土を除去すると、第11次調査で検出したS B 470西廂及び身舎北西隅柱穴を確認した。調査区を北側に拡張したところ、さらに柱筋を描えた柱穴を検出したことから、北側にも廂が付くものと推測された。また、S B 470と重複しそれよりも古い、S B 3450掘立柱建物跡も確認した。11月27日、調査区の全景写真撮影後、平面図作成を開始するとともに、柱穴の様子を探るために一部柱穴の断ち割り調査を行った。28日、柱穴の断面図作成と検出した造構埋土の土層確認を行い、調査の一切を終了した。

## 2 調査成果

今回は、中央公園整備に伴う一連の調査であり、掘立柱建物跡、溝跡、土壤などを発見した。遺構検出面は、いずれも現表土下1.3m下で確認したオリーブ灰色砂質土であり、褐色粘質土や砂が混入している。以下、これら遺構の概要を記載する。

### 発見した遺構と遺物

#### S B 3450掘立柱建物跡（第2・3・4・5図）

第78次調査区で発見した、東西3間、南北3間以上の掘立柱建物跡である。第11次調査時には確認することができなかつたが、今回の調査で北側及び西側の柱列を検出したことにより、建物跡であることが明らかとなつた（註1）。S B 470、S D 3452、S K 3451と重複し、S B 470、S K 3451よりも古く、S D 3452よりも新しい。第11次調査も含め7基の柱穴を検出し、北西隅柱穴と西側の柱列北より1間目柱穴で柱痕跡、西側の柱列北より2間目柱穴で柱抜取り穴を確認した。方向は、西側の柱列で測ると北で約5度東に偏している。規模は南北が西側の柱列で測ると総長5.2m以上、柱間は北より2.73m、約2.5m、東西が北側柱列より1間目柱穴間で測ると総長約6.7mである。掘方の平面形はおよそ方形を基調とし、規模は西側の柱列北より1間目柱穴で測ると、長辺1.1m、短辺0.9m、深さ0.4mである。掘方埋土は2層に分けることができる。1・2層ともに地山ブロックが多量に混入する黒褐色砂質土であり、1層には炭化物粒が僅かに混入している。柱痕跡は直径25～28cmの円形であり、埋土は褐色粘質土である。柱抜取り穴は掘方の中心付近を大きく壊しており、埋土は炭化物が混入する黒褐色粘質土である。

遺物は、掘方から土師器杯（B II類）・甕（A・B類）・須恵器杯III類・柱切取り穴から土師器杯（B V類）が出土している。

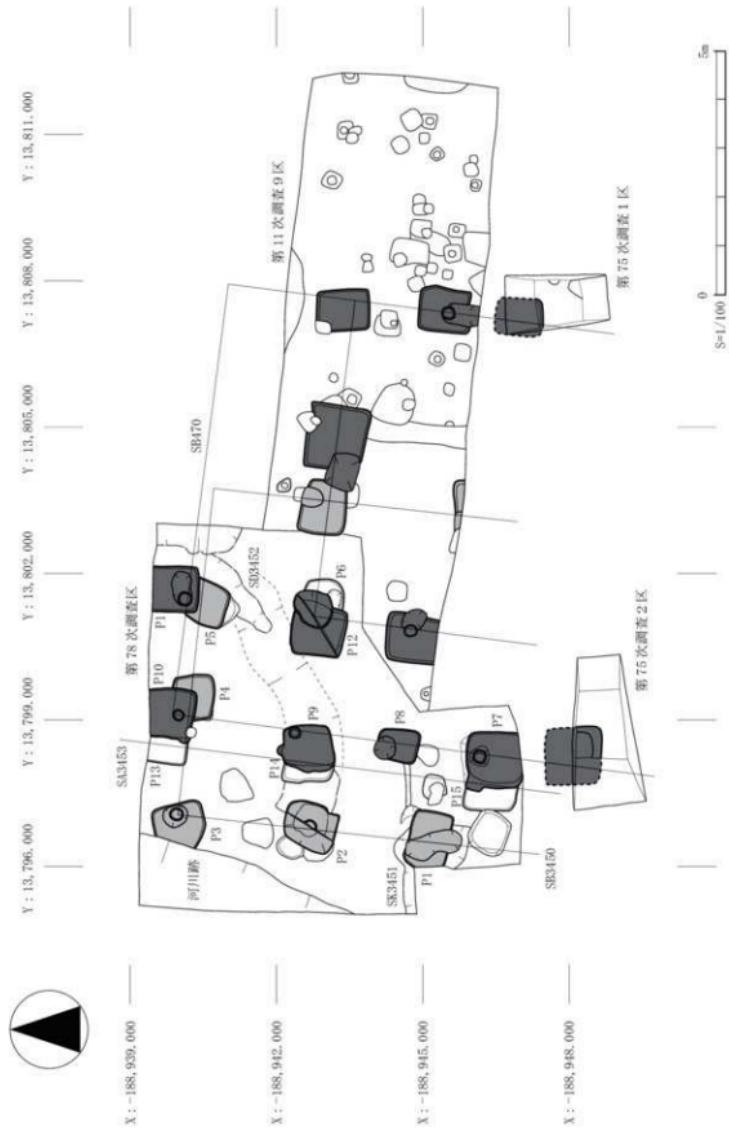
#### S B 470掘立柱建物跡（第2・3・4図）

第75次1・2区及び第78次調査区で発見した、北及び西側に廂が付く掘立柱建物跡である。桁行4間以上、梁行3間と推測される（註2）。S B 3450、S D 3452と重複し、これらよりも新しい。柱穴は第11次調査も含め12基検出した。このうち、第78次調査で検出した柱穴6基をみると、身舎北西隅柱穴と西側柱列北より2間目柱穴で柱抜取り穴、それ以外の柱穴で柱痕跡を確認した。方向は、西側柱列で

註1：S B 3450の東側柱列北より2間目柱穴は、第11次調査の報告ではS B 470の北西より2間目柱穴としていたが、柱穴の位置関係などからS B 3450の柱穴と判断した。

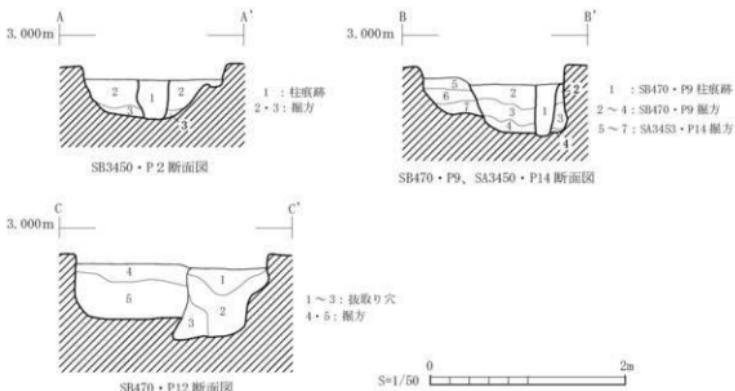
註2：第11次調査の報告では西廂付の掘立柱建物跡として報告したが、第78次調査では西側身舎及び廂の北側延長線上でこれらと柱筋を描えた柱穴（P 10・11）を確認した。P 10・11を別の建物跡を構成する柱穴とすることも可能であるが、ここでは一連の建物を構成する柱穴と判断し北廂として扱えた。

第2図 第78次調査区ほか合成図





第3図 SB470・3450ほか平面図



第4図 SB470・3450、SA3453 柱穴断面図

測ると北で7度35分東に偏している。桁行は西側柱列で総長8.2m以上、柱間は北より2.40m、約1.9m、約1.9m、約1.9mである。梁行は北妻で約8.8mと推測され、柱間は西より1間目で2.38mである。掘方の平面形はおよそ方形を基調とし、規模は身舎北西隅柱穴で測ると、長辺1.1m、短辺1m、深さ55cmである。埋土は地山ブロックが多量に混入する黒褐色粘質土及び黄灰色粘質土である。柱痕跡は、いずれも直径20~26cmの円形であり、埋土は黄灰色粘土である。柱抜取り穴は掘方の隅付近を壊しており、埋土は身舎北西隅柱穴と西側柱列北より2間目柱穴では、地山ブロックが多く混入する黒褐色または褐灰色粘質土である。

遺物は、掘方から土師器杯（B類）・甕（A・B類）、丸瓦（II B類）、柱抜取り穴から土師器甕（A・B類）、須恵器杯（III類）、丸瓦（II B類）が出土している。

#### SA3453 柱列跡（第2・3・4図）

南北方向に並ぶ3基の柱穴を検出した。SB470掘立柱建物跡の古い段階の西側柱列の可能性もあるが、内側柱列で同様な柱穴を確認していないことから、ここでは柱列跡と判断した。いずれもSB470西側柱穴に大部分が破壊されており、柱痕跡や柱抜取り穴は確認できない。柱間は北より約3.0m、約3.8mである。北より1間目柱穴で見ると、埋土は3層に分けることができる。1層は褐灰色砂質土、2層は黄灰色粘質土、3層は灰色砂質土であり、いずれにも地山ブロックが多量に混入している。遺物は出土していない。

#### SD3446~3449溝跡（第7図）

第77次調査1・2区で発見した、幅30~50cmの南北方向の溝跡である。いずれも地山ブロックが多量に混入する黒褐色粘質土であり、炭化物粒が僅かに認められる。

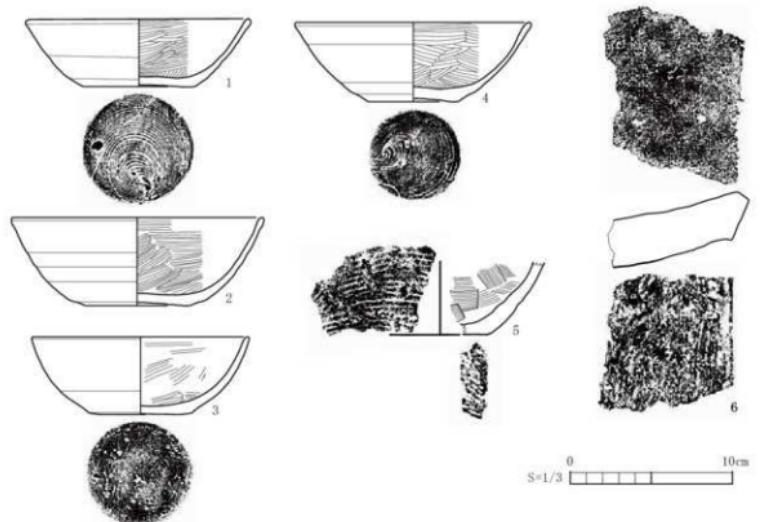
#### SK3451 土壙（第3・6図）

第78次調査区で発見した土壙である。SB3450と重複し、それよりも新しい。平面形は不整形と推測されるが、詳細は定かでない。規模は東西2.2m以上、南北1~1.5mである。埋土は炭化物が多量に混

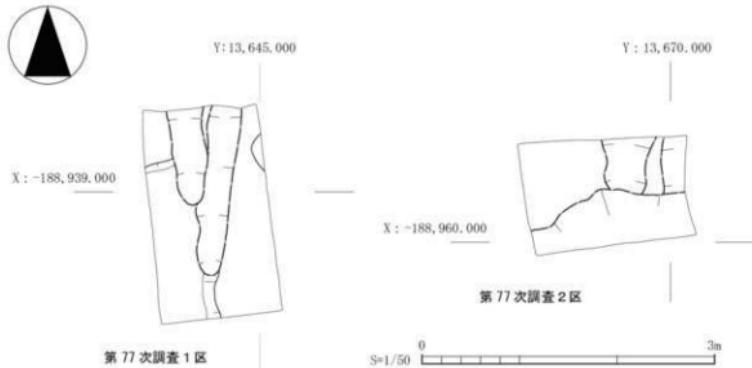
0  
10cm

番号	種類	以上素面 縁化	特徴		口径 径存半 径存40	底径 径存40	高さ	写真 回数	資料 番号	備考
			外面	内面						
1	土師器 直	3D-05 P1・解剖	ロクロナデ 底部・側面下端：手持ちハラケズリ	ヘラミガキ。黑色処理	13.80 8/24	6.2 9/24	4.1	-	P1	BV類

第5図 S B3450 出土遺物



第6図 S K3451 出土遺物



第 7 図 第 77 次調査区遺構平面図

入する黒褐色土であり、土器片が多く混入している。

遺物は、土師器杯（B II・B II c・B V類）・甕（A・B類）、丸瓦（II B類）が出土している。

### 3まとめ

今回の調査では、掘立柱建物跡、溝跡、土壌を発見した。このうち掘立柱建物跡では、第 11 次調査で検出していた S B 470 を再確認したほか、これよりも古い S B 3450 を新たに発見した。S B 470 は第 11 次調査では西廂を持つ建物跡として報告したが、第 78 次の成果より、北側にも廂が付くものと判断した。また、一部柱穴の精査及び S K 3451 埋土の掘り下げを行い、少ないながらも年代を推測できる資料が出土している。以下、第 75・78 次調査で発見した遺構の年代について検討する。

#### （1）遺構出土土器の概要

S K 3451 からは、土師器杯・甕、須恵器瓶・甕、丸瓦、平瓦が出土している。このうち、土師器杯には B II 類 2 点、B II c 類 1 点、B V 類 9 点、その他 B 類が 22 点あり、底部が明らかな資料では B V 類が主体的に認められる。器形全体が明らかなものをみると、B II c 類では底径／口径比が 47、器高／口径比が 37、B V 類では底径／口径比が 39～51、器高／口径比が 31～35 である。底部内面のヘラミガキは横方向のものと放射状のものがあり、B II c 類は横方向、B V 類では横方向のものが 4 点、放射状のものが 4 点である。土師器甕は A 類が 2 点、B 類が 30 点であり、B 類が圧倒的に多く認められる。須恵器瓶・甕はいずれも小片である。丸瓦は II B 類が 2 点、平瓦は II B - b 類が 1 点出土している。

S B 3450 は、新旧関係で S K 3451 よりも古い掘立柱建物跡である。掘方から土師器杯・甕、須恵器杯・杯蓋・甕、柱切取り穴および柱抜取り穴から土師器杯・甕、須恵器杯、丸瓦が出土している。掘方から出土した土師器杯は、B II 類が 1 点である。底径／口径比が 43、器高／口径比が 27 であり、底部内面のヘラミガキは横方向である。土師器甕は A 類が 7 点、B 類が 7 点である。須恵器杯は、III 類の小片が 1 点出土している。柱切取り穴から出土した土師器杯は、B V 類の小片が 1 点である。柱抜取り穴から出土した土師器甕は B 類が 1 点であり、須恵器杯は III 類の小片が 1 点、丸瓦は II B 類が 1 点である。

S B 470 は、新旧関係で S B 3450 よりも新しい掘立柱建物跡である。掘方から土師器杯・甕・柱抜取穴から土師器杯・甕・須恵器高台付杯・甕・丸瓦が出土している。土師器杯は全て B 類であり、甕は掘方出土のものが A 類、抜取穴出土のものでは A 類が 2 点、B 類が 14 点である。丸瓦は II B 類である。

## (2) 出土土器及び遺構の年代

第 78 次調査区で出土した遺物をみると、土師器 A・B 類が認められること、須恵系土器が全く含まれないことが指摘できる（表 1）。同一地点の調査である第 11 次調査 9 ドレンチにおいても、須恵系土器は鉢が 1 点認められるのみであることから、本地区で検出した遺構の年代については、およそ 8 世紀後葉～9 世紀代の範疇と理解することが可能であろう。

市川橋遺跡で 8 世紀後葉から 9 世紀代とされる土器群には、延暦 9 年～24 年頃とした S X 1351 C 河川出土土器（註 1）、延暦 24 年を上限とする 9 世紀中葉頃とした S X 1351 D 出土土器（註 2）、9 世紀後半でも新しい段階とした S X 3400 出土土器（註 3）がある。これらの中から、特に土師器杯・甕を抽出し分類毎に数値化したのが表 2 である。これをみると、時期が新しくなるにしたがい、①土師器杯の底部切り離しは V 類が多数を占める、②底径／口径比が小さくなる、③器高／口径比が大きくなるといった傾向

表 1 出土遺物統計

種類	器種	分類	出土土地				
			SB3450掘方	SB3450切取	SB470掘方	SB470抜取	SK3451
須恵器	甕	B			2		22
		B II					2
		B II c					1
		B III					
		B V		1			9
須恵器	甕	A	7			2	2
		B	7		1	15	30
	杯	III	1			1	
		不明			3		
	杯蓋		1				
須恵器	高台付杯					1	
	杯蓋		1				
	瓶						1
	甕		1		2	3	5
	瓦	丸瓦			1	2	2
	瓦	平瓦	II B				1

表 2 土師器出土比較

	土師器杯 A・B 類比較		土師器杯 B 類分類別比較						土師器甕 A・B 類比較				
	A 類	B 類	I 類				II 類		III 類	IV 類	V 類	底径／口径比	器高／口径比
			I 類	II 類	III 類	IV 類							
S X 1351 C 1・2 線 (延暦 9～24 年)	4.50%	95.50%	31.0% (13.6)	57.1% (24.6)	2.4% (0.6)	9.0% (4.6)	38～62	25～41	34.4% (44.6)	65.6% (94.6)			
S X 1351 D 1・2 線 (延暦 24～9 世紀中葉頃)	15.30%	84.70%	16.7% (12.6)	40.3% (29.6)	13.9% (10.6)	1.4% (1.6)	27.8% (20.6)	44～57	27～46	16.7% (19.6)	89.3% (159.6)		
S X 3400 (9 世紀後半)	0%	100%	10% (5.6)	14% (7.6)		76% (38.6)	33～57	33～57	0%	100%			
S K 3451	0%	100%	25% (3.6)			72% (9.6)	39～51	31～36	6% (2.6)	94% (36.6)			

註 1：多賀城市教育委員会『市川橋遺跡一城南土地区分整理事業に係る発掘調査報告書Ⅱ』多賀城市文化財調査報告書第 70 集 2003

註 2：註 1 と同じ

註 3：多賀城市教育委員会『多賀城市内の遺跡 2—平成 20 年度発掘調査報告書』多賀城市文化財調査報告書第 95 集 2009

が見てとれる。また、9世紀後半頃になると、土師器杯・甕はすべてB類で占められるといった様子も指摘できる。

これらと比較すると、SK 3451出土の土師器杯はSX 3400のものと類似していることから、およそ9世紀後半頃のものと考えられる。

SB 3450はSK 3451よりも古いことから、9世紀後半以前であることが明らかである。出土数は少ないものの、土師器甕A・B類が同数認められることを考慮すれば、8世紀後葉から9世紀初め頃とすることも可能であろう。

SB 470はSB 3450よりも新しいことから、9世紀初頭以降の年代が与えられる。このことは、柱抜取り穴から出土した土師器甕をみると、SB 3450に比べB類の占める割合が増えていることともおよそ一致するものである。



1 調査区全景 (南西から撮影)



2 S B 3450・P 2 断面



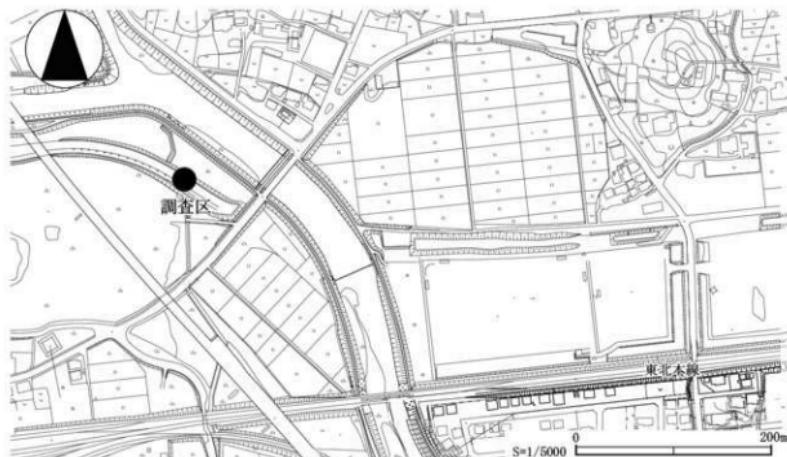
3 S B 470・P 12 断面

### III 市川橋遺跡第76次調査

#### 1 調査に至る経緯・経過と調査成果

本調査は、県道泉・塩釜線新設（浮島道路改築）に伴う案内標識設置工事に伴う発掘調査である。平成21年6月、宮城県仙台土木事務所より、当該工事に係る埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。3箇所に標識を設置する計画であり、1辺1m、深さ2.5～3.5mの基礎工事を行うことが示されていた。中央部の標識は既存の橋上面であり、東側は旧用水路内に位置しており既に遺構面が削平されていることが明らかであったため、工事による遺跡への影響はない判断された。一方、西側では遺構検出面に達することが推測されたため、工事開始と合わせて確認調査を実施することとした。

7月17日、標識設置箇所で、1辺約2mのトレンチを設置し、重機により工事が及ぶ深さまで掘削を行ったが、盛土内で収まることを確認した。デジタルカメラによる現状での写真撮影を行い、現地調査を終了した。



第1図 調査区位置図



西側設置箇所の掘削状況（1）



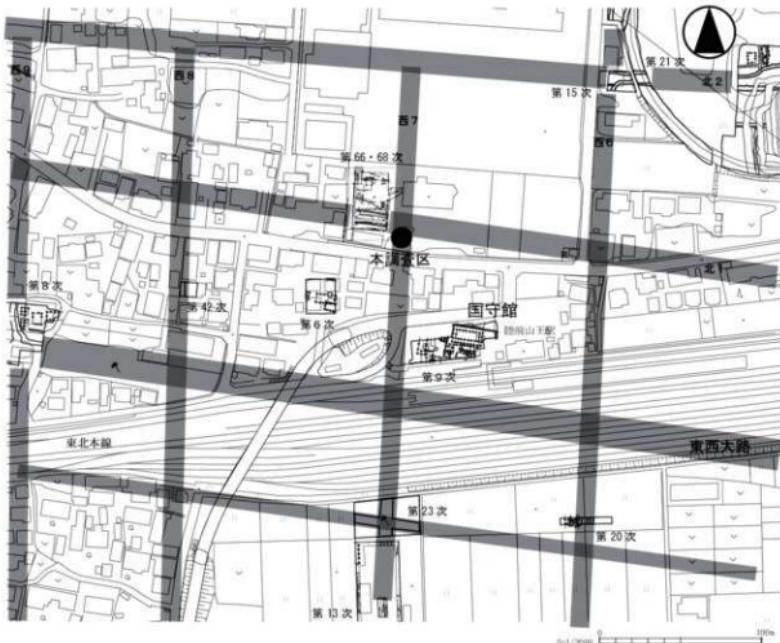
西側設置箇所の掘削状況（2）

## IV 山王遺跡第78次調査

### 1 調査に至る経緯と経過

本調査は、山王地区公民館施設改修工事に伴うものである。平成22年1月25日に多賀城市長より当該地区における山王地区公民館施設改修事業計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画は電気・機械設備の設置、給排水・ガス管理工事、フェンス設置、駐車場整備である。当該地は今年度に実施した第68次調査の調査成果から現地盤より約70cm下で遺構検出面を確認していた。このため電気設備工事のハンドホール、外灯部分については、遺跡への影響が懸念されることから確認調査で、その他の部分については、既存の埋設管と同位置に設置するものであり、遺跡に与える影響は軽微と考えられることから工事立会いで対処することになった。その後、2月1日に多賀城市長より埋蔵文化財発掘の通知が宮城県教育委員会教育長あてに提出され、発掘調査の実施に至ったものである。

調査区は8ヶ所に設定した（1～8T）。2月9日から断続的に実施し、随時、平面図作成と写真撮影を行った。いずれの調査区でも盛土・表土下が遺構検出面となっていた。1Tでは南北方向の溝跡1条を、2・3Tではそれぞれで小ビット1基を発見した。4Tでは何も検出されなかった。10日、5Tで南北方向の溝跡1条を発見した。13日、6Tで並行する南北方向の溝跡2条を発見し、西7南北道路跡と推定された。24日、7Tで比較的規模の大きい柱穴3基を発見した。26日、8Tで堆積層もしくは遺構埋



第1図 調査区位置図

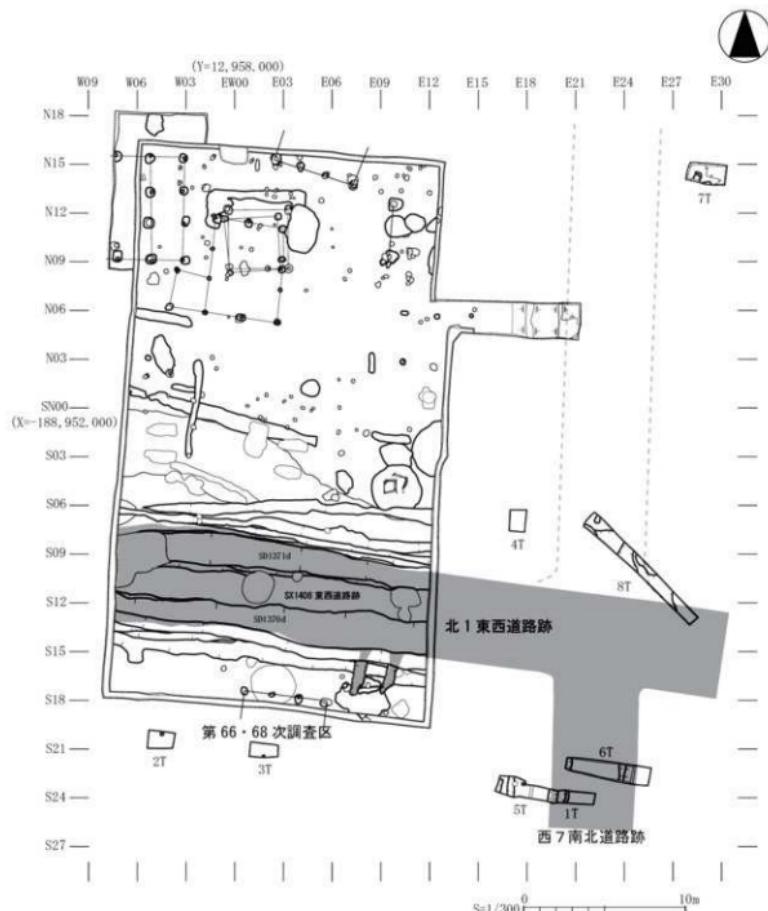
土の輪郭を検出した。

## 2. 調査成果

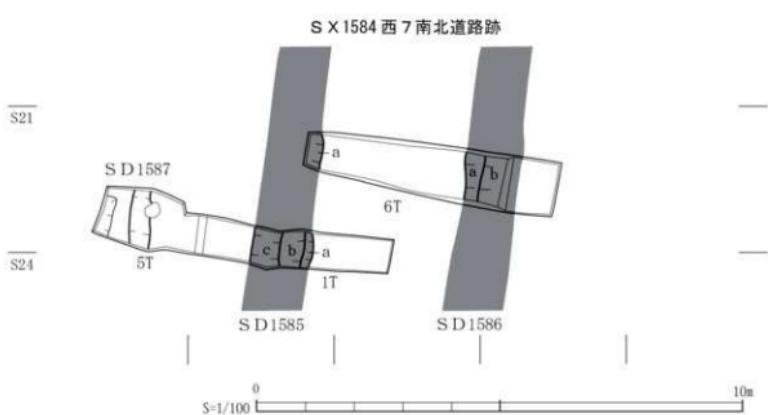
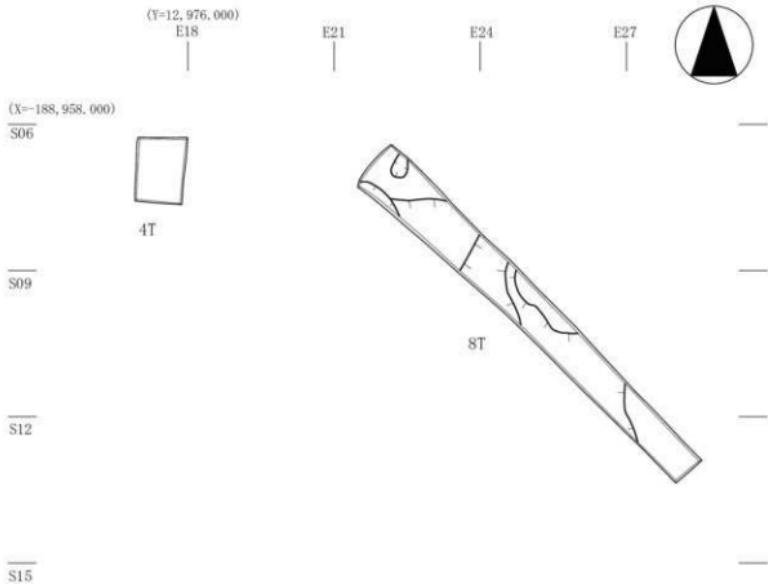
### 発見遺構

#### S X 1584 西 7 南北道路跡

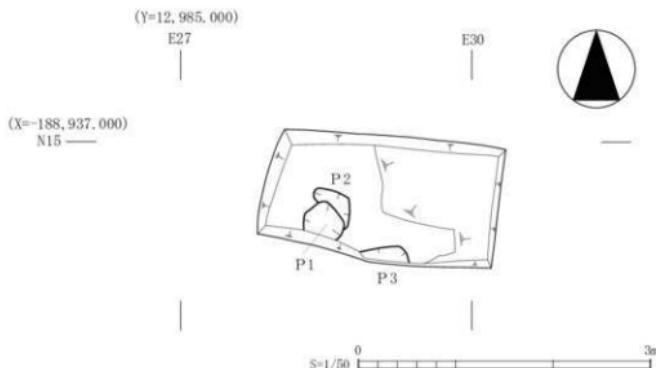
1 T と 6 T で発見した南北道路跡である。南北大路から約 875 m 西に位置しており、城外の方格地割のうち西 7 南北道路に相当する。長さは約 2.8 m まで検出し、南北とも調査区外へと延びている。東西両側（西侧溝 S D 1585、東側溝 S D 1586）に素掘りの側溝を伴っており、西側溝の新旧関係から 3 時期（A～



第2図 検出遺構全体図



第3図 1・4～6・8T 平面図



第4図 7T平面図

C期)の変遷があることを確認した。A期の西側溝でみると、長さは1Tから6Tにかけて約2.8m以上を測り、方向は北で約5度東に偏している。西側溝のSD 1585溝跡では3時期(a～c期)、東側溝のSD 1586溝跡では2時期(a～b期)までの変遷を確認した。SD 1585溝跡は東から西へと移動して造り替えられており、a期は幅0.2m以上、埋土は地山土に近似する灰黄褐色土、b期は幅0.5m以上、埋土は均質な褐色粘質土、c期は幅0.5m、埋土は地山ブロックや炭化物を含む褐色粘質土である。SD 1586溝跡は西から東へと移動して造り替えられており、a期は幅0.4m以上、埋土は褐色土と灰黄褐色土のブロックが混じり合う。b期は幅0.5m以上、埋土は均質な黄灰色土である。路面幅はA期で約3m、B期で約3.7m(推定)を測る。なお、8Tでは堆積層もしくは遺構埋土の違いが平面で確認されたが、道路側溝に相当する輪郭は把握できなかった。

#### SD 1587溝跡

5Tで発見した南北方向の溝跡である。確認できた長さは約1.2mで、方向はほぼ発掘基準線に沿う。  
その他の遺構

7Tで3基の柱穴を発見した。P1・2は重複しており、前者が新しい。平面形は不整方形で、一边30～40cmを測る。

#### 3まとめ

今回の調査では西7南北道路跡を発見した。3時期の変遷があり、時期が新しくなるにつれて路面を拡幅していることが判明した。年代については、確認段階にとどめているため詳細は不明であるが、本道路跡は国守館(北1・西7区画)の西辺を区画するものであることから、国守館存続時の10世紀前半代には機能していたと考えられる。また、国守館の北辺を区画する北1東西道路の構築年代が第66・68次調査の調査成果を踏まえると9世紀後半頃とされているので、この頃まで遡る可能性がある。北1東西道路以北の南北区画道路の状況については、今回の調査では充分に把握できなかつたので今後の課題としたい。



1 T SD 1585 溝跡検出状況 (南より)



6 T SD 1586 溝跡検出状況



6 T S D 1585 溝跡検出状況 (東より)



7 T 柱穴検出状況 (北より)

## V 山王遺跡第79・80次調査

### 調査に至る経緯と経過と調査成果

第79次調査は、個人住宅の上下水道工事に伴うものである。平成21年12月18日に施工業者より当該地区における上下水道工事と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画は污水管、桿を長さ3.5m、幅1.5m、最深1.6m掘削するというものであり、掘削面積が狭隘で遺跡に与える影響は軽微と考えられることから工事立会いで対処することとなった。

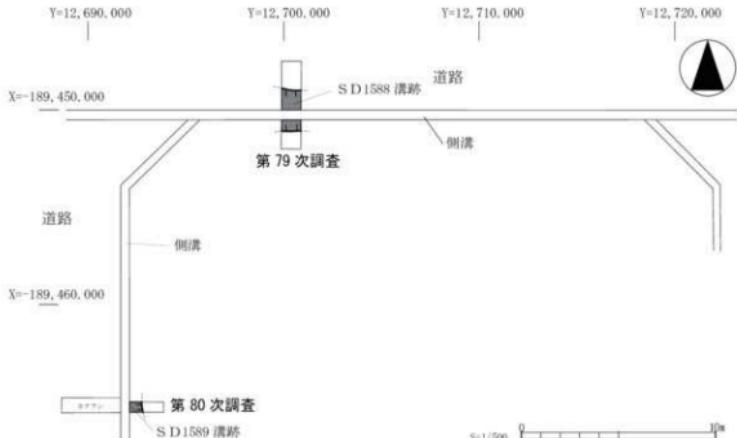
平成22年3月4・5日に工事立会いを実施した。その際、表土下約1mの深さの地山面において黒褐色粘質土で埋まつた幅約2mの東西方向のSD1588溝跡を発見した。

第80次調査は、下水取付管理設工事に伴うものである。平成22年2月16日に施工業者より当該地区における上下水道工事と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画は下水管を長さ5m、幅1m、最深1.7m掘削するというものであり、埋蔵文化財への影響が懸念された。このため、平成22年3月19日に施工業者より調査に関する依頼書と承諾書の提出を受けて確認調査を実施することとなった。

調査は平成22年3月24日に実施した。その結果、東側の調査区では、表土下約1.2mの深さで地山面に到達し、褐灰色粘質土で埋まつた幅約0.7m以上の南北方向のSD1589溝跡を発見した。また、西側の調査区では、深さ1.5m以上に及ぶ擾乱が確認された。



第1図 調査区位置図



第2図 検出遺構全体図



S D 1588 溝跡検出状況（南より）



S D 1589 溝跡検出状況（東より）

## VI 新田遺跡第14次調査

### 1 調査に至る経緯と経過

本調査は、平成6年度に実施した宅地造成工事に伴う発掘調査である。平成6年3月30日、地権者より発掘調査の承諾書が提出されたことを受け、4月4日より現地での発掘調査に着手したものである。

はじめに、重機を使用して位置指定道路部分の表土除去を行う。翌日より作業員を投入し、II層上面の精査及び遺構検出作業を開始する。調査区中央でSK 1332、南端部でSD 1331を確認し、直ちに埋土掘り下げ及び写真撮影、平面・断面図作成を行った。7日からII層の掘り下げを開始し、III層上面でSX 1321、SD 1329等を発見した。11日、遺構検出状況の写真撮影を行い、翌日より遺構の埋土掘り下げや写真撮影、平面・断面図作成などを随時実施した。この間、SX 1321の性格について検討を重ねたが、遺構の東西ともに調査区外に延びているこ

とから、詳細を知ることができなかつた。そのため地権者と協議を行い、西側に拡張区を設けることとなつた。18日から人力により西側の一部を拡張し、20日にSX 1321が堅穴状遺構になることが明らかとなつた。その後、III層下層の状況を把握する目的で調査区全体の掘り下げを行つたが、遺構を確認することはできなかつた。25日から、調査区の土層断面図の作成を開始し、27日に土色の注記作業を行う。28日、機材および休息用プレハブを撤去し、現地調査の一切を終了した。

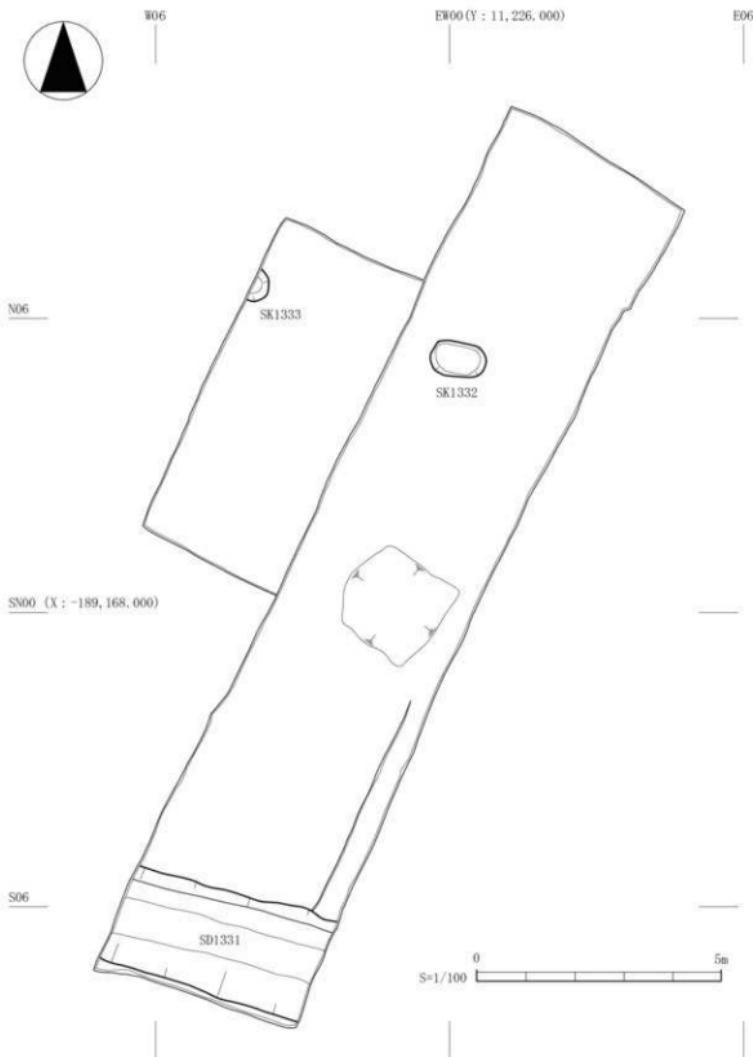
### 2 調査成果

#### (1) 層序(第4図)

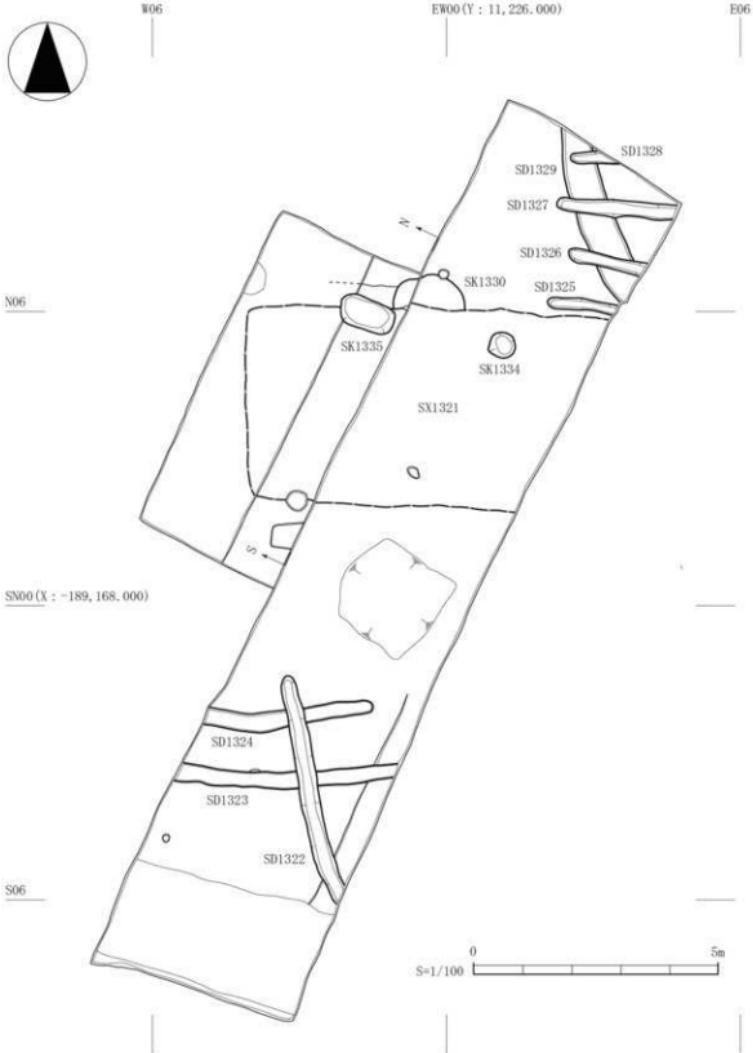
- I 層：現在の表土で、厚さは約50cmである。埋土は6層に細分できるが、1層が砂利、2～6層も近・現代の堆積層と考えられることから本調査では一括して扱つた。
- II 層：全域で確認した黒褐色土の堆積層であり、厚さは15～30cmである。層中からは、古代の土器片が出土している。中世の遺構検出面である。
- III 層：全域で確認した暗褐色砂質土であり、厚さは10～20cmである。古代の遺構検出面である。
- III層下層：にぶい黄褐色砂または暗褐色砂が堆積しており、本地区周辺で広範囲に確認されている古墳時代前期の水田層は確認できなかつた。



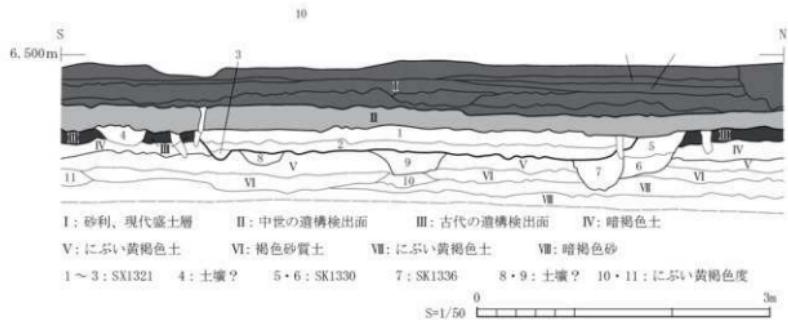
第1図 調査区位置図



第2図 II層上面検出遺構全体図



第3図 III層上面検出遺構全体図



第4図 調査区西辺中央部土層断面図

## (2) 発見遺構と遺物

今回の調査では、III層上面で古代の竪穴状遺構や小溝跡、土壤、II層上面で中世の溝跡や土壤を発見した。以下、検出した層毎に、発見した遺構・遺物について記載する。

### 【III層上面検出遺構】

#### S X 1321 竪穴状遺構（第7・8図）

調査区北半部で発見した竪穴状遺構である。SK 1330・1334・1335と重複し、SK 1334・1335よりも古く、SK 1330よりも新しい。平面形は東西に長い方形であり、方向は北辺で測ると北で約2度南に偏している。規模は東西7.3m以上、南北約4mであり、残存する壁高は最大25cmである。床面はにぶい黄褐色土の地山であり、貼り床は認められない。床面上の施設にはおよそ南辺に沿った溝跡（D 6）と、中央部で検出した焼土が多量に混入する土壤（K 1）、その他土壤（K 2・3・4・5）がある。D 6は上幅47～55cm、下幅25～27cm、深さ11～17cmである。底面は丸く窪んでおり、東西の比高はほとんどない。埋土はにぶい黄褐色砂質土（黒褐色砂質土）である。K 1は、南北に長い不整形の土壤であり、規模は南北82cm、東西46cm、深さ4cmである。壁は非常に緩やかに立ち上がっており、埋土は上層が炭化物を多量に混入する焼土、下層が均質な暗褐色砂質土である。その他の土壤は、長辺57～97cm、深さ18～27cmの小規模なものである。埋土はいずれも黒褐色砂質土が主体であり、炭化物や暗褐色砂質土ブロックが多く混入している。遺構内埋土は2層に分けられる。いずれも黒褐色砂質土であり、上層には暗褐色砂質土ブロックが多く混入している。

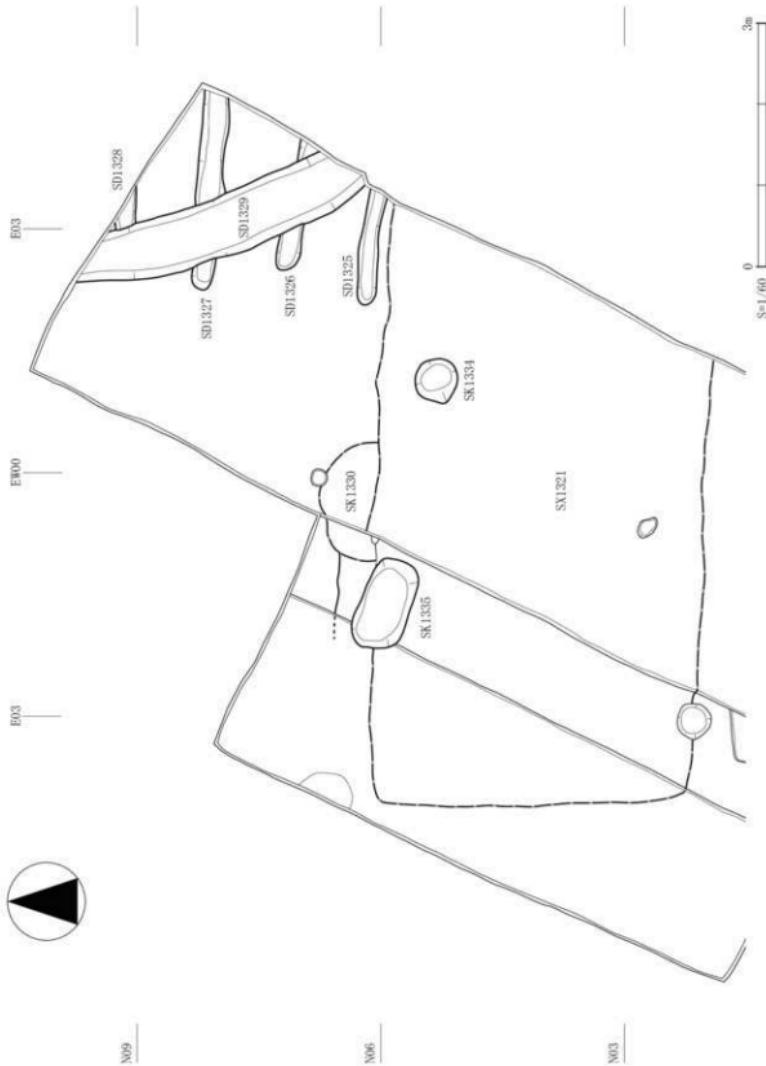
遺物は、土師器杯（A類）・甕（A類）、須恵器杯（II・II a・II b・III類）・高台付杯が出土している。

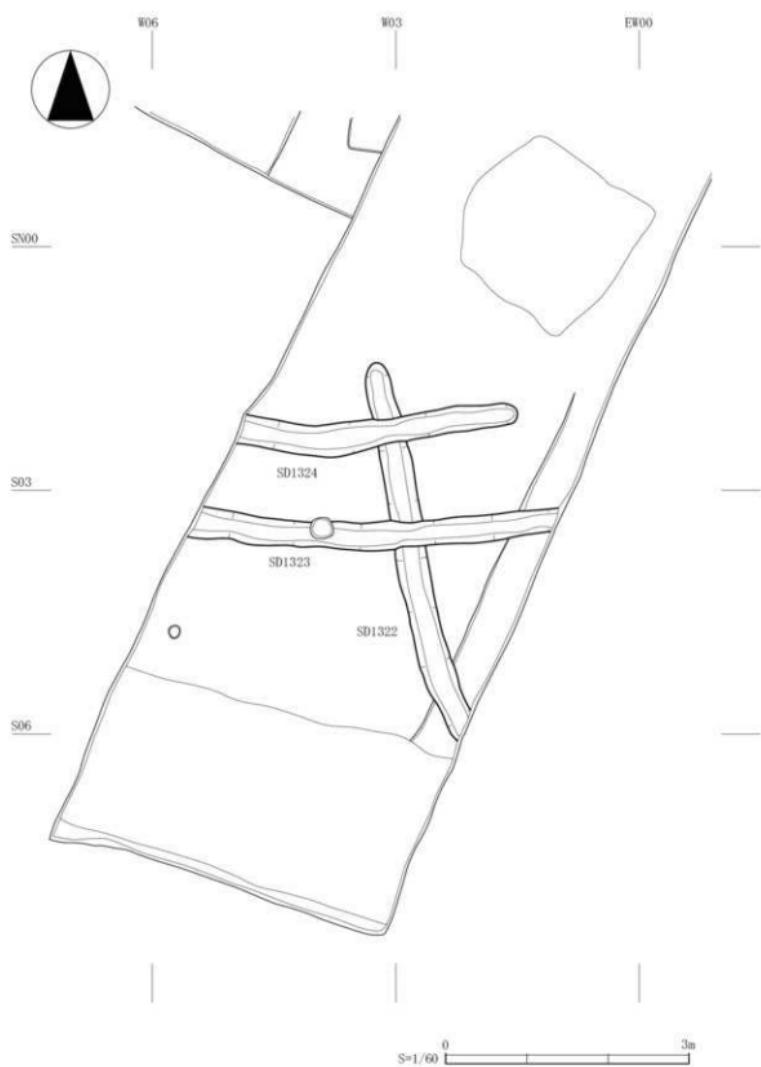
#### S D 1329 溝跡（第5図）

調査区北半部で発見した南北方向の溝跡である。SD 1325・1326・1327・1328と重複し、それらよりも古い。方向は、東辺で測ると北で約21度西に偏している。規模は、長さ3.7m以上、上幅60～76cm、下幅35～55cm、深さ8～10cmである。底面は平らに成形されており、南側に向かって僅かに低くなっている。壁は底面付近は緩やかであるが、上方は急傾斜で立ち上がっている。埋土は2層に分けられる。いずれも暗褐色砂質土が主体であり、上層には黒褐色砂質土が多量に混入している。

遺物は土師器甕（A類）が出土している。

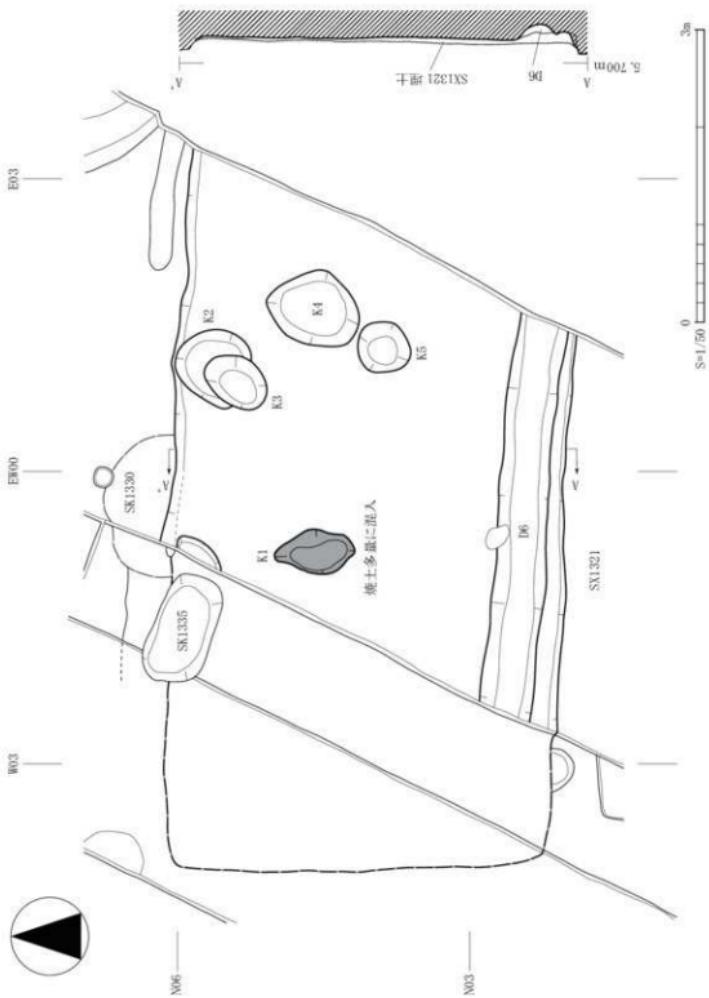
第5図 北半部Ⅲ層上面検出遺構平面図

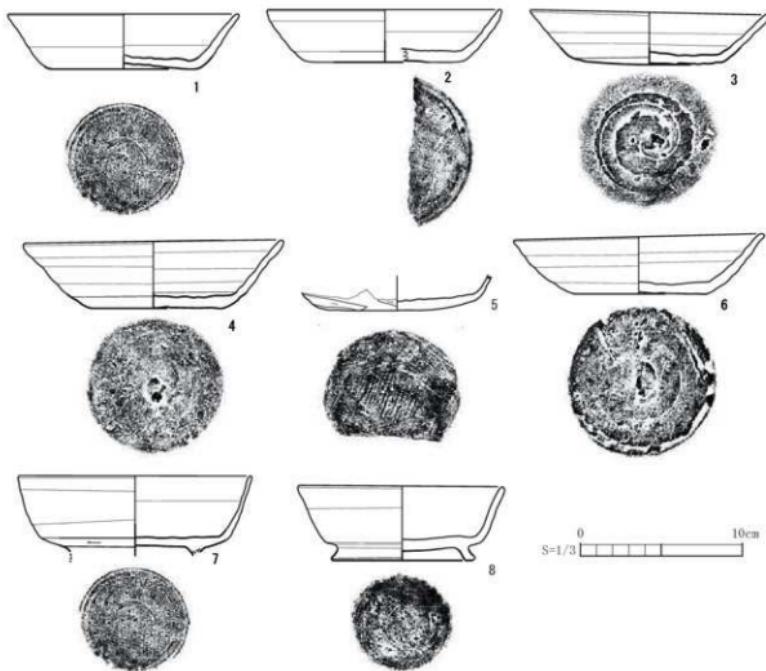




第6図 南半部Ⅲ層上面検出遺構平面図

第7図 SX1321平面・断面図





番号	種類	部位	特徴		口徑 推奨値	底座 推奨値	最高 設置 高さ	実際 設置 高さ	参考 番号	備考
			外側	内側						
1	吸塵器 杯	1-1	ロクロナデ 底部：ヘラ切り	ロクロナデ	14.1 14/24	8.0 24/24	3.4	-	88	■面 ヘラギリ「X」
2	吸塵器 杯	1-1	ロクロナデ 底部：手持ち～ヘラギリ	ロクロナデ	14.4 17/24	(8.4) 16/24	3.3	-	811	■面 ヘラギリ
3	吸塵器 杯	1-1	ロクロナデ 底部：ヘラ切り	ロクロナデ	14.8 12/24	9.1 24/24	3.3	-	85	■面
4	吸塵器 杯	1-1	ロクロナデ 底部：ヘラ切り	ロクロナデ	16.0 20/24	8.4 24/24	4.1	-	87	■面
5	吸塵器 杯	1-1	ロクロナデ、下平：手持ち～ヘラギリ 底部：静止点切り～手持ち～ヘラギリ	ロクロナデ	-	8.8 24/24	-	-	821	■平面
6	吸塵器 杯	1-1	ロクロナデ 底部：ヘラ切り	ロクロナデ	15.40 21/24	8.5 24/24	3.5	-	86	■面 ヘラギリ「X」
7	吸塵器 高台付杯	1-1	ロクロナデ 底部：手～底部：倒錐～ヘラギリ	ロクロナデ	14.4 24/24	-	-	-	84	
8	吸塵器 高台付杯	1-1	ロクロナデ 底部：ヘラギリ	ロクロナデ	12.7 14/24	9.8 15/24	4.6	-	89	

### 第8図 S X1321 出土遺物

### S X 1337 小溝群（SD 1325～1328 溝跡）（第5図）

調査区北半部で発見した東西方向の溝跡群であり、およそ1m間隔で並んでいる。SD 1329と重複し、それよりも新しい。方向は、北側のSD 1327・1328がおよそ東西の發掘基準線と一致しており、SD 1326は東で約11度、SD 1325は東で約7度南に偏している。規模は、上幅20～46cm、深さ7～14cmである。底面は平らに成形されており、東に向かって僅かに低くなっている。埋土はいずれも暗褐色砂質土が主体である。遺物は出土していない。

### SD 1323・1324 溝跡（第6図）

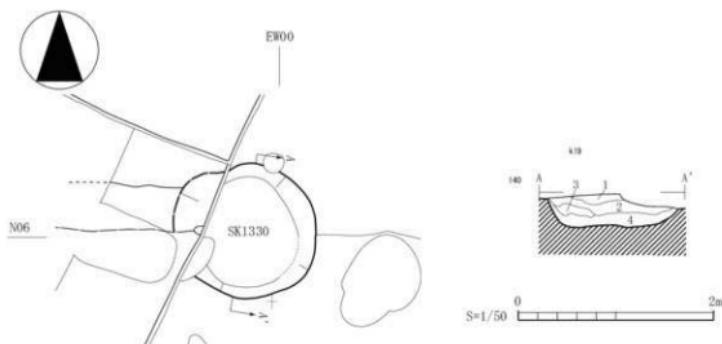
調査区南半部で発見した東西方向の溝跡であり、北側に湾曲しながらおよそ並行に伸びている。SD 1322と重複し、それよりも古い。規模は、上幅28～41cm、深さ15cmである。底面は平らに成形されており、西に向かって僅かに低くなっている。壁はほとんど起伏がなく、急傾斜で立ち上がっている。埋土は2層に分けられる。上層は黒褐色砂質土、下層が暗褐色砂質土であり、上層には暗褐色砂質土が多く混入している。遺物は出土していない。

### SD 1322 溝跡（第6図）

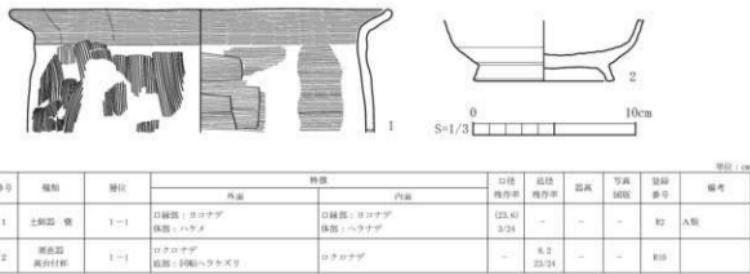
調査区南半部で発見した南北方向の溝跡であり、南端部で東側に僅かに屈曲している。SD 1323・1324と重複し、それよりも新しい。方向は、屈曲部より北側で測ると、北で約11度西に偏している。規模は、長さ4.7m以上、上幅30～40cm、下幅14～24cm、深さ18～21cmである。底面は平らに成形されており、南側に向かって低くなっている。壁はほとんど起伏がなく、急傾斜で立ち上がっている。埋土は2層に分けられる。上層は黒褐色砂質土、下層が暗褐色砂質土であり、上層には暗褐色砂質土が多く混入している。遺物は出土していない。

### SK 1330 土壙（第9・10図）

調査区北部で発見した土壙である。SK 1321と重複し、それよりも古い。平面形はやや東西に長い円形であり、規模は長軸約1.5m、短軸約1.3m、深さ48cmである。底面はおよそ平坦である。壁はほとんど起伏がなく、急傾斜で立ち上がっている。埋土は黒褐色砂質土が主体であり、灰白色火山灰、灰黄褐色土、炭化物が粒状に多量に混入している。



第9図 SK 1330 平面・断面図



第 10 図 SK 1330 出土遺物

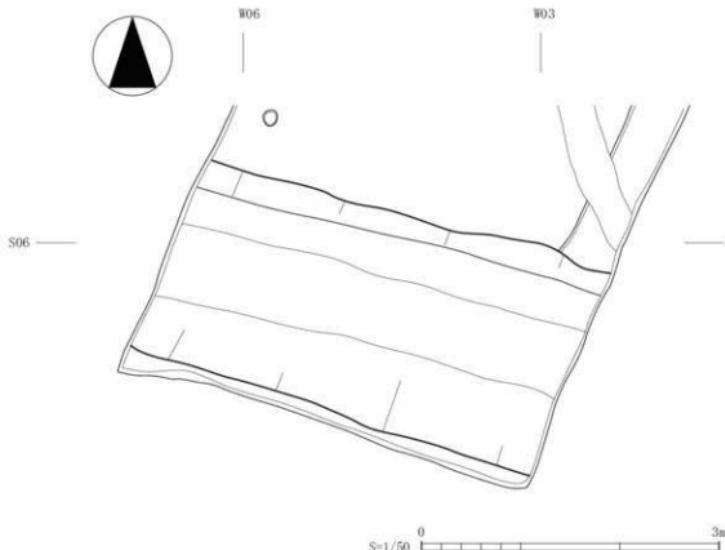
遺物は、土師器壺（A類）、須恵器高台付杯が出土している。

#### 【Ⅱ層上面検出遺構】

##### SD 1331 溝跡（第 11 図）

調査区南端部で発見した東西方向の溝跡である。方向は、東で約 17 度南に偏している。規模は、長さ 4.2 m 以上、上幅 2.05 ~ 2.25 m、下幅 0.68 ~ 0.76 m、深さ 43 ~ 80 cm である。底面は南壁から北壁に向かって傾斜しており、北壁付近では南側に向かって低くなっている。壁はほとんど起伏がなく、急傾斜で立ち上がっている。

遺物は土師器杯（B類）の小片が出土している。



第 11 図 SD 1331 平面図

### S K 1332 土壙（第2図）

調査区北部で発見した土壙である。平面形は東西に長い梢円形であり、規模は東西約1.1m、南北約0.7m、確認できた深さは20cmである。壁はほとんど起伏がなく、急傾斜で立ち上がっている。遺物は出土していない。

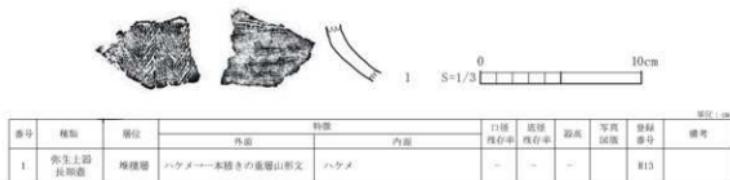
### S K 1333 土壙（第3図）

調査区北部で発見した土壙である。平面形は円形と推測されるが、大部分が調査区外にあるため詳細は明らかでない。規模は南北68cm、東西34cm以上、確認できた深さは28cmである。壁はほとんど起伏がなく、緩やかに立ち上がっている。埋土はにぶい黄褐色砂質土である。

遺物は、無釉陶器鉢が出土している。

#### 【堆積層出土遺物】

出土層位は明らかでないものの、III層下層から弥生土器長頸壺の肩部小片が出土している。内面は横方向のハケメ調整、外面は縦方向にハケメ調整を施した後に一本描き沈線により重層山形文が描かれている。年代は中期後半頃と考えられる。



第12図 堆積層出土遺物

### 3まとめ

今回の調査では、III層上面でS X 1321 積穴状遺構、S K 1330・1334・1335 土壙、SD 1325～1328 溝跡、II層上面でSD 1331 溝跡、S K 1332・1333 土壙を発見した。以下、検出面ごとに発見した遺構の年代について検討する。

#### （1） III層上面

S X 1321からは、土師器杯・甕、須恵器杯が出土している。土師器杯・甕は小片であり、図化したものはない。破片総数で89点出土しており、すべてA類である。須恵器杯にはII類が1点、IIa類が1点、IIb類が1点、III類が4点あり、IIa・IIb類を除きいずれも全体の1/2以上が残存している。底径/口径比は53～62、器高/口径比が22～26である。土師器杯・甕がA類で占められる点を考慮すれば、下限を8世紀後葉以前に求めることが可能である。また、須恵器杯の口径/底径比及び器高/口径比をみると、8世紀中葉頃とされる山王遺跡SD 667 溝跡（註1）やSD 180 B 溝跡出土土器（註2）と共に通している（表1）。したがって、S X 1321もそれらと同じ頃の年代と捉えられる。

S K 1330は複重関係でS X 1321よりも古い遺構であり、8世紀中葉以前の年代が推測される。出土した土師器杯がすべてA類で占められていることとも矛盾するものではない。

SD 1329からは、土師器甕A類が出土している。点数は僅かであるがおよそ8世紀後葉以前の年代と捉えておきたい。

その他の遺構については出土遺物がなく遺構の年代は明らかでないが、中世の遺物が含まれていないことから、およそ古代の範疇におさまるものと考えられよう。

## (2) II層上面

S K 1333 から無釉陶器擂鉢が出土しており、およそ中世の遺構と考えられる。

S D 1331、S K 1332 については、S K 1333 と同じ検出面であることを考慮し、中世の範疇と捉えておきたい。

表1 土師器・須恵器出土状況比較一覧

	土師器杯 A・B類出土比較		土師器甕 A・B類出土比較		須恵器杯 法量比較	
	A類	B類	A類	B類	底径／口径比	器高／口径比
	SX1321	100%	0%	100%		53～62
SD667溝跡 (8世紀中葉頃)	100%	0%	100%	0%	50～61	23～30
SD1808溝跡 (8世紀中葉頃)	100%	0%	100%	0%	53～69	21～31
SX1351A河川跡 (SX1351B以前の8世紀後葉)	44.10%	55.90%	65.90%	34.10%	48～68	22～33
SX1351B河川跡 (延暦9年以前の9世紀後葉)	83.30%	16.70%	80.60%	19.40%	51～73	25～31
SX1351C 1・2層河川跡 (延暦9～24年頃)	4.50%	95.50%	34.40%	65.60%	38～62	25～41

註1：宮城県教育委員会『山王遺跡V』宮城県文化財調査報告書第174集 1997

註2：多賀城市埋蔵文化財調査センター『山王遺跡—第10次発掘調査概報—』多賀城市文化財調査報告書第27集 1991



III層上面検出遺構全体図（北より撮影）



II層上面検出遺構全体図（南より撮影）



S X 1321 遗物出土状况



S D 1331 断面 (西壁)



1



2



3



4



5



6



7



8

1 : R 13 弥生土器 (第5図1)

2 : R 19 無軸陶器

3 : R 5 須恵器杯 (第9図3)

4 : R 6 須恵器杯 (第9図6)

5 : R 7 須恵器杯 (第9図4)

6 : R 8 須恵器杯 (第9図1)

7 : R 11 須恵器杯 (第9図2)

8 : R 4 須恵器高台付杯 (第9図7)

#### 出土遺物

## VII 新田遺跡第 60 次調査

### 1 調査に至る経緯と経過

本調査は、公共下水道汚水管工事に伴うものである。平成 21 年 11 月 10 日に新田遺跡内における下水道工事計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が、多賀城市長から提出された。計画は、長さ約 32 m にわたって、幅 0.9 m、最深約 1.8 m の掘削を行うというものである。掘削幅が狭いことから、工事立会いで対処することにした。

工事立会いは、平成 22 年 2 月 2 日に実施した。対象地の北側から掘削を行ったところ、現地表面から約 1 m 下で溝跡を発見した。ただちに、埋土の掘り下げを開始し、続いて写真撮影、平面図作成を行い、翌 3 日に終了した。

### 2 発見遺構

#### SD 1992 溝跡

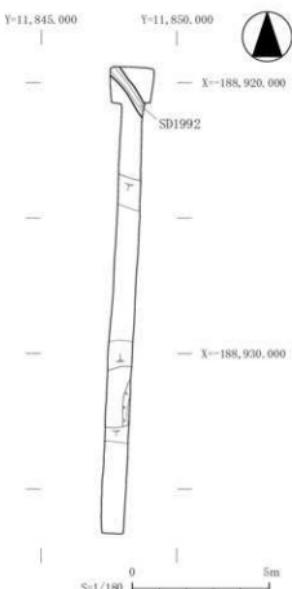
南北方向に斜行する溝跡で、地山直上に薄く堆積する灰白色火山灰を若干含む灰色土の上面で検出した。方向は、北で約 34 度西に偏している。規模は、上幅 30 ~ 35 cm、下幅 15 ~ 20 cm で、深さは検出面から約 10 cm である。底面は丸みをもち、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は、灰オリーブ色土の単層で、ややグライ化している。遺物は、出土していない。時期は、灰白色火山灰を含む土層を切っていることから、10 世紀前葉以降と考えられる。下限については不明である。



溝跡検出状況（南より）



第 1 図 調査区位置図



第 2 図 調査区平面図

## VIII 新田遺跡第61次調査

### 1 調査に至る経緯・経過と調査成果

本調査は、戸建住宅2棟の建設に伴うものである。平成22年2月10日に新田遺跡内における戸建住宅建設計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が、地権者から提出された。計画は、基礎工事の際に、各棟ごとに直径60cm、長さ6mの杭を46本打ち込むというものである。当該地は、新田遺跡の南端部に位置し、これまでの調査例が少ないことから、遺構の分布状況などの詳細は不明であった。したがって、遺構の有無の確認を目的にした、確認調査の実施に至ったものである。2月19日に調査に関する承諾書及び依頼書の提出を受け、2月23日に現地調査を行った。

2箇所の建物建設予定地で、重機によって約2mの深さまで掘り下げたところ、いずれも、厚さ約70cmの現代の盛土の下に、100~120cmの厚さで、灰色粘土と灰色砂が交互に堆積することが認められた。さらに、その下層には植物遺存体を含む黒色粘土が25cm以上厚さで堆積することが確認された。

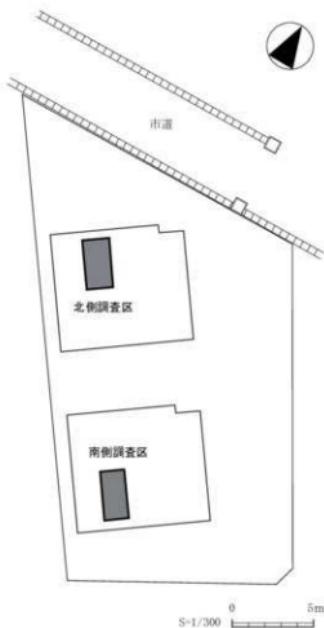
この調査の結果、遺構・遺物は発見されなかった。



北側調査区土層堆積状況（東より）



第1図 調査区位置図



第2図 調査区配置図

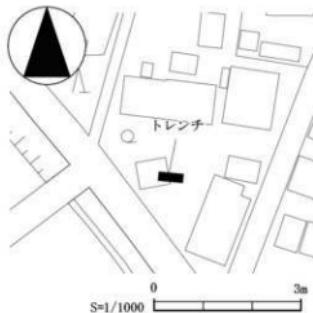
## IX 新田遺跡第 62 次調査

### 1 調査に至る経緯と経過

本調査は、戸建住宅建築に伴う発掘調査である。平成 22 年 2 月、地権者より当該区における住宅建築と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。建築計画では、基礎工事の際に直径約 60 cm、深さ 7 m の柱状改良を 29 箇所で行うことと、最深 90 cm の掘削を伴う給排水管付設工事等が示されていた。柱状改良による埋蔵文化財への影響が懸念されたことから、直ちに遺跡保存の協議を行ったものの、基礎工法の変更是不可能であるとの結論に達したため、本調査に至ったものである。平成 22 年 3 月 24 日に地権者から調査に関する依頼・承諾書の提出を受け、3 月 27 日に現地調査を行った。対象区中央部から重機による掘削を開始したが、現表土から深さ 2.6 m に至っても砂や粘土が交互に堆積するのみであり、遺構・遺物は発見されなかった。デジタルカメラによる現状での写真撮影を行い、現地調査の一切を終了した。

### 2 調査成果

当該区については、砂や粘土の堆積状況から、河川またはその氾濫原と考えられる。



第 1 図 調査区位置図

## X 小沢原遺跡第14次調査

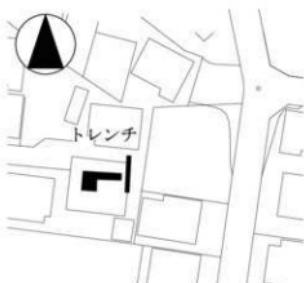
### 1 調査に至る経緯と経過

本調査は、個人住宅建築（建て替え）に伴う発掘調査である。平成21年12月、地権者より当該区における住宅建築と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。建築計画では、基礎工事の際に最深45cmの掘削、給排水管付設工事では最深80cmの掘削を行うことが示されていた。本遺跡内においては、遺構検出面までの深さが30cmにも満たない非常に浅い場所が多く認められることから、掘削工事による埋蔵文化財への影響が懸念された。このため、既存住宅撤去時に確認調査を実施し、遺構検出面までの深さ及び遺構の有無を把握し、この結果を受けて盛土等の厚さを変更するか否かを判断することとなった。平成22年3月10日に地権者から調査に関する依頼・承諾書の提出を受け、3月12日に現地調査を行った。大きく搅乱が及んでいた北西部を除き、建築部分の南西部から中央、及び東辺部にかけて重機による表土除去を実施した。

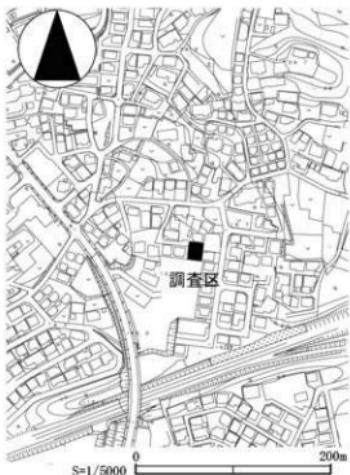
現表土（I層）下約30cmで明黄褐色砂質土の安定した地盤（II層）が現れたため、重機の掘削に合わせて表面の精査を行ったが、遺構・遺物は発見されなかった。当該区は隣接する東側の宅地に比べ約1.6m低くなっていることや、II層上面が極めて平坦であることから、宅地造成時に大きく削平を受けていることが明らかであった。このため、対象区内で一部未確認箇所があったものの、デジタルカメラによる現状での写真撮影を行い、現地調査の一切を終了した。

### 2 調査成果

宅地造成時に著しく削平されており、遺構・遺物は発見されなかった。



第2図 トレンチ配置図



第1図 調査区位置図



西側トレンチ

## XI 西沢遺跡第17次調査

### 1 調査に至る経緯と経過

本調査は、倉庫建築に伴う発掘調査である。平成21年12月、地権者より当該区における倉庫建築と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画では、倉庫建設に先立ち現地盤に約2.8mの盛土を施すことが示されていた。当該区は平成10年度に実施した第6次調査区とおよそ一致していたものの、一部未調査の部分が含まれている可能性もあったことから、盛土前に試掘調査を実施することで地権者と合意に達した。平成22年2月18日に地権者から調査に関する依頼・承諾書の提出を受け、直ちに現地調査を行った。重機による表土除去を実施した結果、第6次調査後に埋め戻した、礫が多量に混入する土砂が確認できたほか、倉庫の位置も第6次調査区の南側に計画されていることも明らかとなった。第6次調査区の南側については、北側から南に下る自然の沢の堆積が確認されている場所であることから、当該計画による遺跡への影響はない判断し、調査の一切を終了した。



第1図 調査区位置図



掘削状況写真

## XII 大日南遺跡第9次調査

### 1 調査に至る経緯と経過

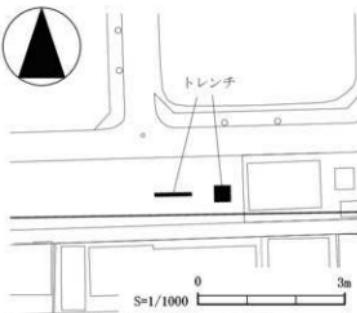
本調査は、共同住宅建築に伴う発掘調査である。平成22年3月、地権者より当該区における共同住宅建築と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。建築計画では、基礎工事の際に直径約60cm、深さ5mの柱状改良を75箇所で行うことと、最深1.2mの掘削を伴う給排水管付設工事等が示されていた。柱状改良及び給排水管付設工事による埋蔵文化財への影響が懸念されたことから、直ちに遺跡保存の協議を行ったものの、基礎工法の変更は不可能であるとの結論に達したため、本調査に至ったものである。平成22年3月28日に地権者から調査に関する依頼・承諾書の提出を受け、3月30日に現地調査を行った。対象区西側より重機による掘削を開始し、現表土（I層）及び旧水田耕作土（II層）下で、粗砂層（III層）を確認した。III層は、北側で実施した第7・8次調査区でも確認しており、本遺跡内で認められる中世の遺構検出面以前の河川埋土と考えられる。III層上面での精査を実施したが、遺構・遺物は発見されなかったため、デジタルカメラによる現状での写真撮影を行い、現地調査の一切を終了した。

### 2 調査成果

中世の遺構検出面以前の河川埋土であるIII層が確認されるのみで、遺構・遺物は発見されなかった。



第1図 調査区位置図



第2図 トレンチ配置図

## 報告書抄録

ふりがな	たがじょうしないのいせき 1					
書名	多賀城市内の遺跡 1					
副書名	平成 21 年度ほか発掘調査報告書					
シリーズ名	多賀城市文化財調査報告書					
シリーズ番号	第102集					
編著者名	武田健市、島田敬、相澤清利					
編集機関	多賀城市埋蔵文化財調査センター					
所在地	〒985-0873 宮城県多賀城市中央二丁目 27 番 1 号 TEL : 022-368-0134					
発行年月日	西暦 2011 年 7 月 30 日					
ふりがな 所調遺跡	ふりがな 所在地	コード				
		市町村	遺跡番号	北緯	東経	調査期間
いわきけいし 市川橋遺跡 (第75次)	みやぎけんたがじょうし 宮城県多賀城市 いわきけいしがたてそと 市川字館前地内	042099	18008	38 度 11 分 2 秒	140 度 59 分 4 秒	20090722
いわきけいし 市川橋遺跡 (第76次)	みやぎけんたがじょうし 宮城県多賀城市 いわきけいしがたてそと 市川字伏石	042099	18008	38 度 18 分 7 秒	140 度 58 分 59 秒	20090725
いわきけいし 市川橋遺跡 (第77次)	みやぎけんたがじょうし 宮城県多賀城市 いわきけいしがたてそと 市川字館前地内	042099	18008	38 度 11 分 2 秒	140 度 59 分 10 秒	20090805
いわきけいし 市川橋遺跡 (第78次)	みやぎけんたがじょうし 宮城県多賀城市 いわきけいしがたてそと 市川字館前地内	042099	18008	38 度 11 分 2 秒	140 度 59 分 4 秒	20091125 20091128
きんのう 山王遺跡 (第78次)	みやぎけんたがじょうし 宮城県多賀城市 きんのうさんおとけいし 山王字毛上28	042099	18013	38 度 18 分 1 秒	140 度 58 分 41 秒	20100209 20100309
きんのう 山王遺跡 (第79次)	みやぎけんたがじょうし 宮城県多賀城市 きんのうさんおとけいし 山王字山王四区 187、188	042099	18013	38 度 17 分 46 秒	140 度 58 分 30 秒	20100304 20100305
きんのう 山王遺跡 (第80次)	みやぎけんたがじょうし 宮城県多賀城市 きんのうさんおとけいし 山王字山王四区 189-6外	042099	18013	38 度 17 分 46 秒	140 度 58 分 30 秒	20100324
にいた 新田遺跡 (第14次)	みやぎけんたがじょうし 宮城県多賀城市 にいたせいたい 新田字 後 110-7 外	042099	18012	38 度 17 分 55 秒	140 度 57 分 29 秒	19940404 19940428
にいた 新田遺跡 (第60次)	みやぎけんたがじょうし 宮城県多賀城市 にいたせいたい 山王字北寿福寺 地内	042099	18012	38 度 18 分 3 秒	140 度 57 分 55 秒	20100202 20100203
にいた 新田遺跡 (第61次)	みやぎけんたがじょうし 宮城県多賀城市 にいたせいたい 新田字 壁西29-1	042099	18012	38 度 17 分 25 秒	140 度 57 分 54 秒	20100223
						10 m <sup>2</sup>
						個人住宅建設

にいだ 新田遺跡 (第62次)	みやびのたのめじょうし 宮城県多賀城市 にいだあさきたせんか 新田字北関合30-2	042099	18012	38度 17分 24秒	140度 57分 48秒	20100327	10 m <sup>2</sup>	個人住宅 建設
おぎのはな 小沢原遺跡 (第14次)	みやびのたのめじょうし 宮城県多賀城市 おぎのはな 浮島二丁目81-5外	042099	18043	38度 18分 14秒	140度 00分 00秒	20100310 20100312	90 m <sup>2</sup>	個人住宅 建設
にしづわ 西沢遺跡 (第17次)	みやびのたのめじょうし 宮城県多賀城市 にしづわ 市川字伊保石地内	042099	18017	30度 18分 33秒	140度 59分 35秒	20100218	4 m <sup>2</sup>	倉庫建設
だいにちのみなん 大日南遺跡 (第9次)	みやびのたのめじょうし 宮城県多賀城市 だいにちのみなん 高橋四丁目18-4外	042099	18048	38度 17分 19秒	140度 58分 44秒	20100330	25 m <sup>2</sup>	共同住宅 建設
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
いとうかわせし 市川橋遺跡 (第75次)	集落・都市	平安	柱穴	土師器・須恵器				
いとうかわせし 市川橋遺跡 (第76次)	集落・城館					遺構・遺物なし		
いとうかわせし 市川橋遺跡 (第77次)	集落・都市	平安	溝跡	土師器・須恵器				
いとうかわせし 市川橋遺跡 (第78次)	集落・都市	平安	掘立柱建物、土壤	土師器・須恵器		二面兩付建物跡発見		
さんわのう 山王遺跡 (第78次)	集落・都市	平安	道路、柱穴			西7南北道路発見		
さんわのう 山王遺跡 (第79次)	集落・都市	中世	溝			幅2mの東西溝発見		
さんわのう 山王遺跡 (第80次)	集落・都市	中世	溝			南北溝発見		
にいだ 新田遺跡 (第14次)	集落・都市	奈良 平安	竪穴状遺構、土壤、 小溝	土師器・須恵器・須恵系 土器	奈良時代の竪穴状遺構 発見			
		中世	溝、土壤	無釉陶器				
にいだ 新田遺跡 (第60次)	集落・都市	古代	溝					
にいだ 新田遺跡 (第61次)	集落					遺構・遺物なし		
にいだ 新田遺跡 (第62次)	集落					遺構・遺物なし		
おぎのはな 小沢原遺跡 (第14次)	集落					遺構・遺物なし		
にしづわ 西沢遺跡 (第17次)	集落					遺構・遺物なし		
だいにちのみなん 大日南遺跡 (第9次)	集落					遺構・遺物なし		

要 約	市川橋遺跡第75次調査では、平安時代の柱穴を発見した。
	市川橋遺跡第76次調査では、遺構・遺物は発見されなかった。
	市川橋遺跡第77次調査では、古代の溝跡を発見した。
	市川橋遺跡第78次調査では、平安時代の二面廻付掘立柱建物跡を発見した。
	山王遺跡第78次調査では、平安時代の西7南北道路跡を発見した。
	山王遺跡第79次調査では、中世の大規模な溝跡を発見した。
	山王遺跡第80次調査では、中世の溝跡を発見した。
	新田遺跡第14次調査では、奈良時代の竪穴状遺構、中世の溝跡、土壙を発見した。
	新田遺跡第60次調査では、10世紀前葉以降の溝跡を発見した。
	新田遺跡第61次調査では、遺構・遺物は発見されなかった。
	新田遺跡第62次調査では、遺構・遺物は発見されなかった。
	小沢原遺跡第14次調査では、遺構・遺物は発見されなかった。
	西沢遺跡第17次調査では、遺構・遺物は発見されなかった。
	大日南遺跡第9次調査では、遺構・遺物は発見されなかった。

---

多賀城市文化財調査報告書第102集

多賀城市内の遺跡 I

-平成21年度ほか・発掘調査報告書-

平成23年 7月31日発行

編集 多賀城市埋蔵文化財調査センター  
多賀城市中央二丁目27番1号  
電話 (022) 368-0134

発行 多賀城市教育委員会  
多賀城市中央二丁目1番1号  
電話 (022) 368-1141

印刷 株式会社 工陽社  
宮城県塩竈市尾島町8番7号  
電話 (022) 365-1151

---